

村の中は、まるで、クマバチの巣をつついたような大きな
わざだ。その村人たちのなかで、もみくちやになり、悲鳴
をあげているまっ黒に日焼けた五人の見なれぬ若者たち
に、村人たちは、おとなや子どものだれかれなしに、とび
ついたり、だきついたりしている。

「ようかえってきた。」

「ごくろうだった。」

村人はくちぐちにさげんだ。やがて、^{やまびこ}村長も、そしてま
じない師のミコも家の中からとびだしてきた。

「おう、かえったか、ごくろう、ごくろう。」

村長は、若者のひとりひとりにだきついて、その背をど
しゃべしゃとたたいた。

この若者たちは、ことしの春から、村から北の方向にあ
たる「海辺の村」とよぶところへいっていたのだ。そこへ
いくには、けわしい山や谷や川を越えて、何日も何日も歩
き続けなければならないそうだ。

その村には、広い広い海の向こうの土地から渡ってきた
人びとが住んでいて、かれらは、いつも新しい道具や新し
い物をもっていた。コメを植えることを教えたのも、そし
て、^{おんぼ}織物で布をつくることを教えたのも、みんなこの「海

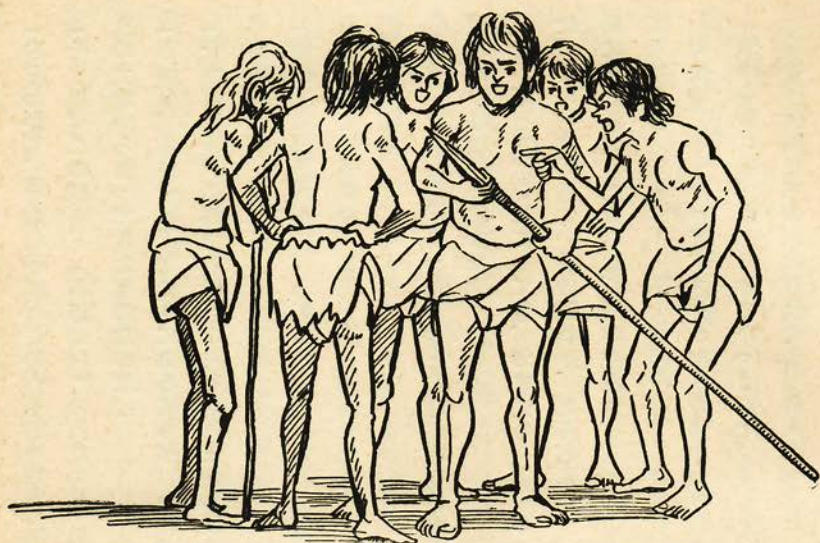
辺の村」の人たちなのだ。

スクネをはじめとする若者五人は、村長の命令で、毛皮
や首輪や腕輪のかざりものなどをたくさんもって、その
「海辺の村」へでかけた。「海辺の村」から、なにかまた
新しい物ももらい、そして、新しいことを教えてもらうた
めだ。

「おやあつ、そのホコは、なんじゃ。」

村人たちは、口ぐちに、スクネとミコトがもっているキ





「なにっ、砂をとかして……。」

「そう。海辺の村の人は、はじめ、なかなか教えようとはしなかった。いや、かれらは、この鉄のホコやオノを毛皮やほかの物とかえるのも、よろこばなかった。でも、おれたちは、なんとかして、このすばらしい鉄を、村へもってきたかった。そして、それがどうして作るものかもしろうとした。村長、おれたちは、とうとう、この鉄をどうして作るかをしつたのだ。」

「おう、でかしたぞ。」

「して、それは、どうして作るんだ。」

村人は、いっせいにスクネの方をみつめた。

「これだ。この砂をとかしてつくるんだ。」

「えっ。」

みんなの目は、スクネが袋のなかから手のひらにとりだしたさらさらした砂にいっせいにそそがれた。

「……そ、その砂をとかすと、そんなにピカピカ光る鉄ができるのか。」

「そうだ。これ砂鉄とよぶんだ。こいつをとかして、石でつくったホコのカタに流しこむ。やがて、それが固まると、また磨き石みがきいしできれいにみかく。すると、こんなにピカピカになるんだ。」

「ふうむ。」

はなやかなお祭りがはじまった。

この村には、おれたちの村のノロさまにあたる、ミコとよぶ女のまじない師しがいる。そして、おれたちの村と同じように、祭壇まつだんが村の広場に設けられていて、祭りのときになると、村じゅうのものが広場に集まる。おれもジロも、大ぜいの村人たちと広場に集まった。

ドーン ドドーン

ドーン ドドーン

タイコが、広場じゅうにひびきわたった。このタイコは、丸太のなかをくりぬき、両がわに毛皮を張ったもので、すごくいい音がする。

タイコの音にあわせ、頭にかざりの羽をさし、白く、すっぽりと、からだをつつんでしまふ、きみような服をつけたミコが、しずかな足どりで祭壇の前に歩みよってきた。

祭壇には、酒のはいった大きな壺つぼがおかれ、米やイモや兔のいけにえがそなえられ、その両わきに、若者たちが「海辺の村」からもってきた鉄のホコとオノとがおかれている。

広場に集まった村人たちは、いっせいに祭壇に向かって頭をたれた。





うたごえはながれ、楽器は鳴りひびき、人びとの踊りはつづく。おれもシロも、手まね足まね、みんなにまじって踊りをおどった。酒をのみすぎたタケルは、二周目に、フウフウいいながら、とうとうすわりこんでしまった。

踊りが火のまわりを四周すると、ひとやすみ、みんなはまたすわりこんで汗をふき、また酒をのみはじめた。そのあいだにも、タイコや楽器はなりひびき、やがて、

ドーン ドーン

という、大きなタイコの音をあいずに、村の若い男と女とが、たき火をはさんで向かいあい、二つの列をつくって並びあった。

ワーツ ワーツ

パチパチパチパチ

歓声と拍手がおこる。

ドンドコ ドコドコ

ドンドコ ドン

ドンドコ ドコドコ

ドンドコ ドン

タイコが調子をとると、男の列も、女の列も、たがいに